はもちろん、ブルーギルですら減り始め今増えている外来魚はチャンネルキャットフィッシュとべヘレイである。

⑤　琵琶湖や霞ヶ浦など大きな湖ではブラックバスの繁殖によってそこに以前から生息していた魚類が食い尽くされ減ってしまうというようなことは起こらないが、小さな池沼ではその可能性も否定できないと考えていたが、小さな池沼でも環境条件が厳しくブラックバスも生きるのがままならないところでは在来魚の減少も起こらないということがわかった。

中本賢さんが雑魚狩いから多くの発見をしているが、今回の環境省のお墨の調査結果をちょっと検討するだけでいろいろなことがわかる。ブラックバスがメダカを千数百個体食べるというお馬鹿な実験が評価されてか、環境省の移入生物対策の検討委員会に唯一魚類関係者として参加している近畿大学の細谷和海さんはこの調査結果から何を学ぶか問いてみたいものである。

ブラックバスの駆除騒ぎに気味悪さを感じる理由の一つは、それがこの間のアメリカの戦争騒ぎと重なり合うことである。一昨年北海道の大沼で2個体のブラックバスが確認された際に北海道開発庁の打ち出した対応策。まず、大きな地曳き網等で徹底的に大沼の魚類を捕獲してしまう。それでもブラックバスがつかまらず穴や割れ目に逃げ込んでしまう可能性があるので、50か所ほどにダイナマイトを仕掛け爆殺する。二人の人物を捕捉するために数か月前にアメリカがアフガニスタンでやったことと同じである。最初反対した北海道の環境保護団体も同意してしまった。しかし、さすがに水産庁が水産資源保護法でダイナマイト使用を禁止していることを理由に許可しなかった。それにしてもおかしい過ぎて怖い。

多くの人々が駆除を認める理由は、ブラックバスは魚食性の害魚だから駆除するのも仕方ないということである。今回、アメリカがイラクを攻撃する最大の理由は、イラクが大量破壊兵器を隠し持ちそれを使用するかもしれないというものである。そして多くの人々がイラクも悪いのだから仕方がないという。とんでもないことである。世界で最も大量の核兵器を所有しているのはアメリカである。それも公然と。在来の淡水魚を最も殺しているのは私たち人間である。アメリカがなぜイラクを攻撃するのかは世界中の多くの人々が気付いているように、イラクなど中東の産油国を植民地化し石油資源を自由にする（アメリカの言い分）と同時に大量の兵器を消費してアメリカの軍需産業に商売させるということでしかない。それを、正義、平和、神といった言葉の過剰包装でごまかしているに過ぎない。

ブラックバスを駆除せよ、日本にいてはいけない、バスフィッシングを禁止せよと主張する桜井新会長の統率のもと活動している全国内水面漁業協同組合連合会の構成メンバーである各地の漁協にしても、ブラックバスによる食害によってアユやワカサギの漁獲量が減少したという具体的なデータを示すことが出来るわけでもなく、まして絶滅の心配される在来淡水魚の保護に熱心なわけでもない。ただし、全国の河川の漁協がこれまで漁業補償と引き換えに認めてきたダムや河口堰の建設、河川改修、砂利採取等による天然の魚の漁獲量減少と琵琶湖総合開発のつけともいえる冷水病による放流アユ確保の困難という二重苦にどこも同じように悩んでいることは確かである。アユを釣る遊漁者にとっても好ましくないこれらの問題の原因を外来魚に全部おっつけて責任回避すると共に新しい釣りであるバスフィッシングをやる若者や子供たちを悪者にすると同時に外来魚対策費という補助金を国や県から引き出すというのが全内漁連のやっていることである。

アメリカやブッシュに殺すな、戦争をするなとは言うが、ここでブラックバスを殺すな、バスフィッシングをするなと主張するつもりはない。ただここのところ、全内漁連主導で内水面漁場管理委員会指示やレジャー規制条例によって外来魚のリリース禁止を決定したり、規制しようとする県がふえている。新潟、岩手、滋賀、秋田に続いて宮城や長野でも検討が進められている。これらの動きに対する筆者の考えを整理すると次のようになる。

漁業者や行政がブラックバスを漁獲（駆除）することに反対するものではない。ただし、釣ったバスをリリースするバスアングラーにリリースするな殺せというのはおかしい。釣ったバスをリリースするか、殺して食べるか、他の湖沼（例えば河口湖）へ放流するかは釣った人の選択の問題である。それよりもリリース禁止は角を矯めて牛を殺す結果となる。

キャッチアンドリリースやバックリミットについて基本から考えるつもりがアメリカのイラク攻撃でちがったことになってしまった。次回にその点はじっくりと迫ってみたい。